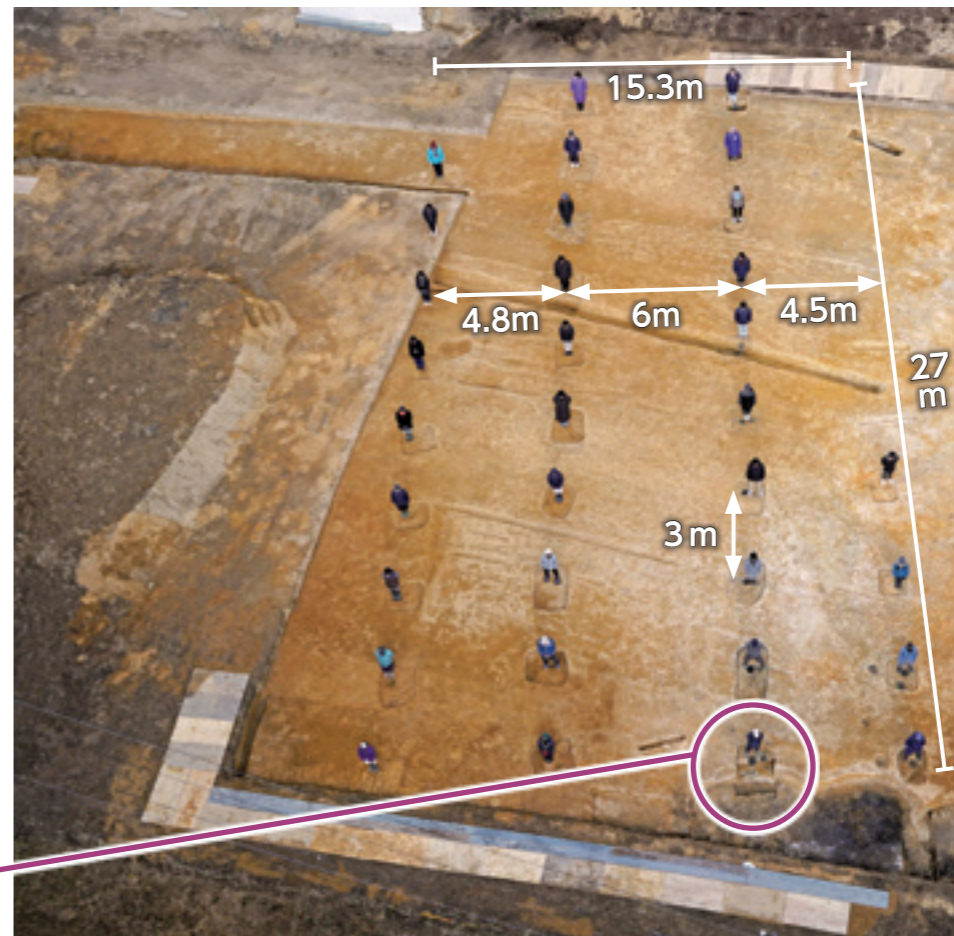


紫香楽宮に関する大型の

掘立柱建物跡見つかる

信楽・東山遺跡で
新発見



▲発掘調査で見つかった大型建物跡

紫香楽宮跡ってどんな遺跡？

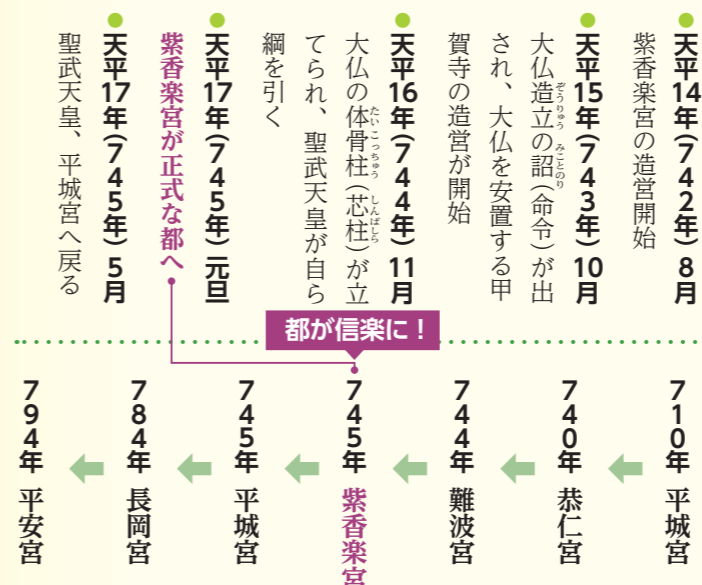
紫香楽宮とは

紫香楽宮は、今から約1270年前の奈良時代の中頃、信楽町の北部に聖武天皇が造営した都です。しかし、相次ぐ山火事や長期間に及ぶ地震の発生により、宮都の造営と大仏造立をあきらめ、聖武天皇は平城宮へ戻っていきます。

紫香楽宮と周辺の遺跡

紫香楽宮跡は、紫香楽宮や甲賀寺に関連する遺跡群のことで、5地区（宮殿跡（宮町地区）、新宮神社地区、鍛冶屋敷地区、北黄瀬地区、寺院跡（内裏野地区））から構成されています。大正15年に寺院跡（内裏野地区）が国史跡に指定され、それ以降、追加指定がされています。紫香楽宮跡の周辺には、他にも東山遺跡、東出遺跡、紫香楽宮東遺跡、雲井遺跡が分布しています。

紫香楽宮関係年表



国史跡紫香楽宮跡の北方に位置する東山遺跡（信楽町黄瀬）の発掘調査で、4列に並んだ計33カ所の柱穴が見つかりました。この規模や立地から、かなりの大型の建物跡であることが推定され、紫香楽宮に関連する主要な施設であると考えられます。

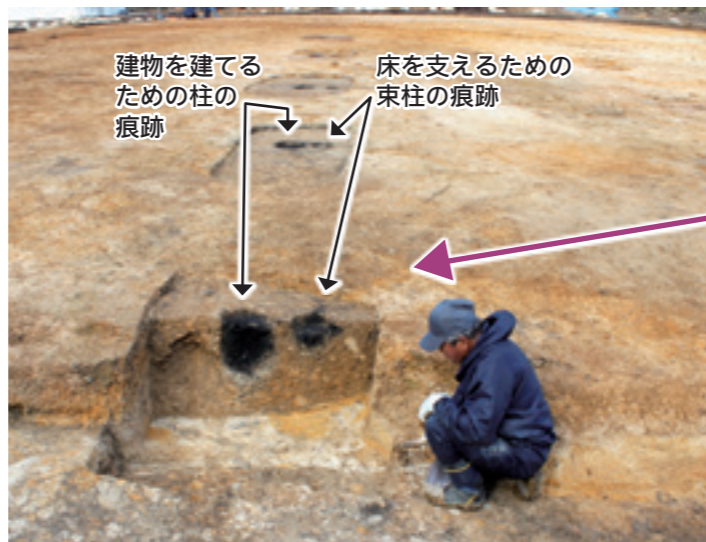
発見された大型建物

今回東山遺跡で見つかった1棟の建物は、南北約27m以上、東西約15.3mで、東西両側に廂をもつ南北に長い南北棟です。ただし、調査区内では建物の両端は確認できず、さらに延びることが分かりました。

建物の幅は、これまでに紫香楽宮跡（宮殿跡 宮町地区）の中枢部で見つかった建物の中でも最大です。

建物の柱間は、南北がいずれも約3mで統一されていますが、東西は身舎が約6m、西側の廂（西廂）が約4.8m、東側の廂（東廂）が約4.5mとなり、非常に広い廂をもつのが特徴的です。このように廂の広い建物は、これまでの紫香楽宮に関連する調査では確認されていません。

また、床を支える束柱と考えられる痕跡もみられ、この大型建物は広い廂を持ち、全面に床を張った非常に珍しい構造の建物であったと想定されます。



▲建物の柱と束柱（断面）

建物には4つの可能性が

今回の調査では遺物が1点も出土していないため、その性格については、現段階で確定することはできません。

しかし、見つかった大型建物の柱穴は、紫香楽宮の中枢部で発見されている中心建物群の柱穴の規模に匹敵する大きさであることから、次の可能性が考えられます。

- ① 正式な都となる前の離宮段階の紫香楽宮の一部
- ② 大仏の体骨柱を建てる儀式に関連した天皇の臨時滞在施設
- ③ 大仏造立と甲賀寺建設を担当した役所
- ④ 大仏造立のために建てられた甲賀寺の一部

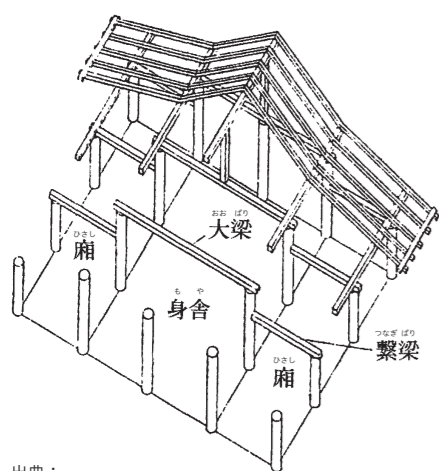
紫香楽宮全容解明の重要な資料に

今回の調査地の周辺には紫香楽宮に関連する重要な遺跡が点在しており、東山遺跡はこれまで調査があまり行われていませんでした。まさに、紫香楽宮の空白地帯となっていた場所です。

その場所で宮殿中枢部に匹敵するような大型建物が確認されたという事実は、今後、紫香楽宮の全容を解明するために重要な資料となります。



建物の構造模式図



出典：箱崎和久「身舎外周柱列の解釈と上部構造」『四面廂建物を考える 報告編』第15回古代官衙・集落研究会報告書 2012 奈良文化財研究所

史跡紫香楽宮跡 宮町地区

東山遺跡

史跡紫香楽宮跡 内裏野地区

▲空から見た紫香楽宮跡